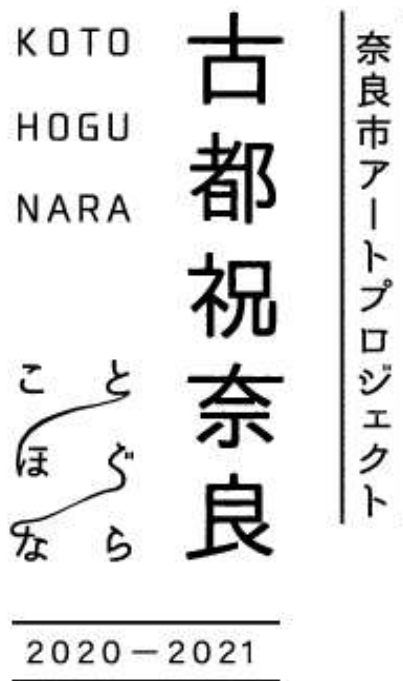


令和 2 年度奈良市アートプロジェクト

「古都祝奈良 2020-2021」

実績報告書



令和 3 年 月

奈良市アートプロジェクト実行委員会

目 次

奈良市アートプロジェクト「古都祝奈良」について	2
令和2年度事業概要	3
奈良市アートプロジェクト実行委員会について	4
各プログラムについて	
クリエイション・プログラム（美術）／EAT&ART TARO「動く石」	5
クリエイション・プログラム（演劇）／ならのまちと創る演劇	9
ラーニング・プログラム／グリーン・マウンテン・カレッジ	14
ラーニング・プログラム／平田オリザの表現ワークショップ	15
広報活動について	17
成果と課題	21
《資料編》	
（1） 令和2年度プログラム参加者数等まとめ	24
（2） 「ならのまちと創る演劇」出演者・スタッフ一覧	26
（3） グリーン・マウンテン・カレッジ各回レポート	28
（4） 令和2年度事業計画	35

奈良市アートプロジェクト「古都祝奈良」について

奈良市では平成 28 年に取り組んだ国家プロジェクト「東アジア文化都市 2016 奈良市」において、古都奈良に現代アートの息吹を吹き込むという、大きなチャレンジに挑みました。特にコア期間「こ と ほ ぐ な ら古都祝奈良」では、社寺やならまちなど「場の力」を背景としたプログラムを展開しました。この事業の成果を持続的に生かしていくために、平成 29 年度から「古都祝奈良」の名称を継承し、奈良市アートプロジェクト「古都祝奈良」を実施しています。

奈良市アートプロジェクト「古都祝奈良」は、1300 年にわたる歴史や文化が今に息づく奈良を舞台に、美術や演劇などの現代の表現を通じて、奈良に集う国内外の人びとと奈良で生活する人びとがともに体験しつくりあげるプロジェクトです。

4 年目となる今年度は、新型コロナウイルス感染症の世界的な感染拡大をうけ、当初想定していたプログラムの実現が難しくなるなか、コロナ禍のなかにあるからこそできること、すべきことをプログラムディレクターらと相談しながら企画を進めました。

そのなかで各プログラム共通のテーマとなったのは「食」でした。

食は、新型コロナウイルス感染症の流行により大きく影響を受けたひとつであり、私たちの生活の源でもあります。美術と演劇、そしてラーニング、各分野においてそれぞれのアプローチで食に迫ることで、私たちにとっての食の価値について提案することができました。

奈良市アートプロジェクト「古都祝奈良」は、古都奈良の新たな価値の創造をめざすものとして、奈良市に暮らす私たち自身の生活を表現活動へとつなげていくことで、奈良が誇る文化の多様性を創造力へとつなげることをめざします。

令和 2 年度事業概要

奈良市アートプロジェクト「古都祝奈良 2020-2021」

期間	令和 2 年 10 月 3 日（土）～令和 2 年 12 月 26 日（土）
会場	ならまちセンター 鶴の茶屋
主催	奈良市アートプロジェクト実行委員会 奈良市
協力	各プログラムの協力団体・個人は各プログラム報告において記載 広報：一般社団法人はなまる ロゴ・デザイン：butter 久保元気 ウェブデザイン：植本沙也可
助成	2020 年度文化庁文化芸術創造拠点形成事業

【プログラム一覧】

クリエイション・プログラム（美術）／EAT&ART TARO「動く石」

とき：令和 2 年 12 月 11 日（金）～20 日（日） ところ：鶴の茶屋

クリエイション・プログラム（演劇）／ならのまちと創る演劇

とき：令和 2 年 12 月 26 日（土） ところ：ならまちセンター市民ホール

ラーニング・プログラム／グリーン・マウンテン・カレッジ

とき：令和 2 年 11 月 15 日（日）・29 日（日）・12 月 13 日（日）

ところ：ならまちセンター芝生広場

ラーニング・プログラム／平田オリザの表現ワークショップ

とき：令和 2 年 10 月 3 日（土）（2 回開催） ところ：ならまちセンター多目的ホール



奈良市アートプロジェクト実行委員会について

平成 28 年 12 月に「奈良市アートプロジェクト実行委員会」を立ち上げ、下記のメンバーにより実行委員会を構成しています。

奈良市アートプロジェクト実行委員会

分野等		所属/役職	氏 名
副委員長	東アジア文化都市	東アジア文化都市 2016 奈良市実行委員会/委員 金沢星稜大学／特任教授	佐々木 雅幸
	文化振興計画	奈良市文化振興計画推進委員会/副委員長 大阪樟蔭女子大学/教授	萩原 雅也
委員長	行政	奈良市長	仲川 げん
		奈良市教育委員会/教育長	北谷 雅人
	監事	税理士	青木 幸子

(順不同・敬称略)

今年度は下記のとおり会議を開催しました。

第 1 回奈良市アートプロジェクト実行委員会（書面決議）

開催日（決議日） 令和 2 年 7 月 13 日（月）

議事

- 第 1 号議案 委員の交代について
- 第 2 号議案 令和元年度事業報告書（案）と決算（案）について
- 第 3 号議案 奈良市アートプロジェクト「古都祝奈良」令和 2 年度事業実施について
- 第 4 号議案 令和 2 年度事業予算（案）について

決議結果 全議案承認

各プログラムについて

クリエイション・プログラム（美術）

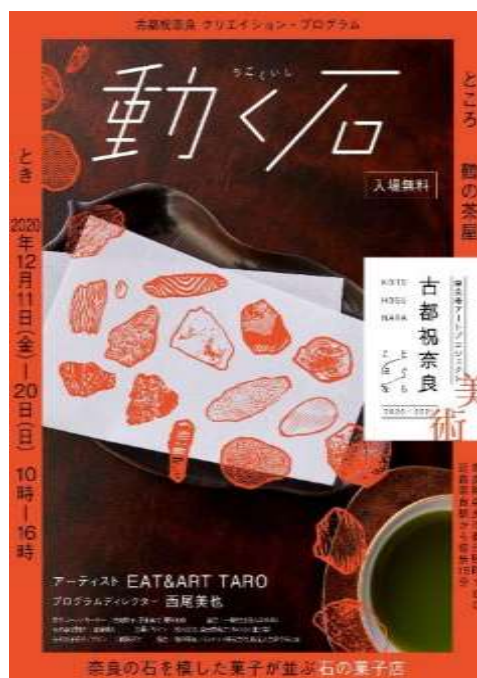
EAT&ART TARO「動く石」

プログラムディレクター：西尾美也

令和2年度は、食をテーマに作品を作り続ける現代美術アーティストのEAT&ART TARO氏による新たなプロジェクトを展開しました。

奈良のある地域で、農作業の時に食べるおやつのことを「ほうせき」（宝石／抱石）と呼ばれることを聞いたEAT&ART TAROは、奈良の石に着目します。寺院の礎石や神社の神石など、奈良に暮らす人々が日常のなかで目にする石の数々からは1300年前の記憶を辿ることができます。

奈良の石を模した菓子が並ぶ“石の菓子店”。お金でなく石で菓子と交換するその店は、「食」という行為を通じてさまざまな事物の価値を問い直す機会をつくりだすものとなりました。



【プログラム概要】

会期：令和2年12月11日(金)～20日(日)

* オンライン受付：12月2日(水)～20日(日)

会場：鶴の茶屋

プログラムディレクター：西尾 美也

プログラム参加者数：7,708人

「鶴の茶屋」来場者	677人
* うち「鶴の茶屋」石の交換参加者	* 327人

[オンライン]

ウェブサイト閲覧者数（12月）	7,031人
* うちオンライン石の交換者	* 32人

【企画・準備】

(1) 9月28日(月) 29日(火) プラン作成のための視察

視察場所	東向商店街、餅飯殿商店街、ならまち周辺、奈良公園、東大寺、漢国神社、 率川神社、よしだTOY'S、茶・アートカフェうつぎ 平城宮跡、市内スーパーマーケット、大安寺
------	---



(2) 11月24日(火) 市長定例記者会見 お菓子作りレクチャー

企画内容発表のため、市長定例記者会見に EAT&ART TARO 氏とプログラムディレクター西尾美也氏とともに出席いただきました。

また、本プログラムの運営受託者(一般社団法人 CHISOU) に石を模した菓子の製作方法についてレクチャーを行っていただきました。



■ 石の菓子店

アートプロジェクト「動く石」にて開店した、お金ではなく、石とお菓子を交換する「石の菓子店」。春日大社参道にある鶴の茶屋のご協力のもと、同店舗を会場にすることができました。

会場には大きなタペストリーが掲示され、そこには「石の菓子店」のロゴが描かれました。(VI デザイン：川路あずさ氏)



菓子店に入ると目にできるのが木製の展示台です。大小、様々な大きさの円形の展示皿が連なる展示台は、奈良の色々な種類の木材を使用して作成されました。

展示台をはじめ店内のデザインは、やぐやぐ道具店（鈴木文貴氏、岩田茉莉江氏）によるものです。

来場者は思い入れのある石を持参し、その石と交換に奈良の石を模した菓子をもらうことができます。石の菓子は5種類あり、それぞれ奈良の地に古くからあり、ストーリーを持った石です。



石と菓子の交換の際は、ご持参いただいた石にどんな思い入れが、どんなエピソードがあるかをお聞きしました。お持ちいただいた石をご提供いただいた方には、石の菓子2種類を選んでお持ち帰りいただきました。

頂いた石は、店内に並ぶ展示皿に年と場所が書かれたカードと共に置かれていきます。開店すぐはまばらにしかなかった石も、数日で置く場所がなくなるぐらいの数が集まりました。



(石の菓子店撮影：衣笠名津美氏)

12月11日（金）から13日（日）までは、アーティストの EAT&ART TARO 氏も会場に常駐し、来場者に本プロジェクトの趣旨を説明したり、石のエピソードを交換したり、積極的にコミュニケーションをとっていただきました。

■ オンライン参加

新型コロナウイルス感染症対策の一環として、「動く石」のウェブコンテンツの展開を行いました。

「古都祝奈良」ウェブサイト内に、「動く石」の特設ウェブサイトを開設し、オンラインストアのように来場しなくても石と菓子の交換ができる仕組みを作りました。

オンライン参加の方は、Zoom 等により EAT&ART TARO さんとお話できる機会をつくり、来店しなくても本プロジェクトを楽しんでいただけるようにしました。

また、特設ウェブサイトには、会場やオンラインで頂戴した石の数々をエピソード付きで紹介することで、会場に足を運ばなくても様々な石が集まっていく様子をオンラインで見えていただくことができました。

特設ウェブサイトでは、その他にもプログラムディレクターやコーディネーターらによる企画の裏側などに関する記事を発信するなど、ウェブコンテンツとしての充実を図りました。



クリエイション・プログラム（演劇）

ならのまちと創る演劇

プログラムディレクター：田上豊

これまで奈良市アートプロジェクト「古都祝奈良」において「青少年と創る演劇」として、奈良の中高生たちと演劇を創作してきた劇作家・演出家の田上豊氏による「ならのまち」に暮らす人々と共に演劇を創作する新規プログラム。

「ならのまち」に暮らす人々から「食」に関するエピソードを集め、それらをもとに短編3作品を創作。出演者もこれまでの中高生限定ではなく、大学生や社会人も含めて募集し、オーディションで選ばれた12人が出演しました。



プログラム参加者数：635 人

出演者※	12 人
クリエイションスタッフ※	7 人
観覧者	86 人
計	105 人

※創作活動（9月～12月）延人日数：247 人日

[オンライン等]

エピソード応募者	15 人
公演3作品動画視聴者（2/16 現在）	515 人
計	530 人

出演者・クリエイションスタッフについて

内 訳	高校生	大学生等	社会人
出演者	4	2	6
クリエイションスタッフ	2	4	1
計	6	6	7

【創作過程】

（１）エピソード募集

特別企画として実施する「ならのまちと創る演劇」はこれまでの「青少年と創る演劇」と違い、脚本のベースとなるエピソードを「ならのまち」に暮らす人々から募集しました。

テーマを、生活の源であり、様々なドラマをうむことができる「食」とすることで、奈良の日常を演劇作品にすることを試みました。

[募集期間]令和２年９月３日(木)～１０月５日(月)

[応募件数] 17 件 （応募者数 15 人）

[応募資格]奈良市に在住・在勤・在学の方

[内 容]食にまつわるエピソード

（例えば、身の回りに起きた、もしくは見たり聞いたりした奈良の食にまつわるエピソードや、「ならのまち」で起こった心温まるエピソードなど）

（２）エピソード提供者へのインタビュー １０月２５日（日）

脚本化するエピソードを選考後、採用したエピソード提供者に対してのインタビューを脚本家２名（田上豊氏、FO ペレイラ宏一朗氏）により行いました。それぞれのエピソードの詳細や食に対する思いなどを聞き取りました。

[協力者] 山口淳子氏、西川みやこ氏、まんじゅうこわい氏

（３）出演者募集・オーディション

これまでの「青少年と創る演劇」から参加枠を広げ年齢制限をなくして出演者の募集を行いました。奈良市内在住・在勤・在学または市内で文化活動を行っている中学生以上を対象に 10 人程度の募集に 20 人もの応募がありました。

すべての方が一次審査を合格され、二次審査では演出家らによるワークショップを通じて出演者の選考を行いました。

[募集期間]令和２年 10 月 6 日(火)～11 月 13 日(金)

[応募資格]奈良市に在住・在勤・在学の方、または奈良市内で文化活動を行っている方

[応募者数] 20 人

[オーディション]一次審査通過：20 人 二次審査通過：13 人（うち 1 人辞退）

（４）稽古

今年度の稽古は感染症対策のため、最初の 1 週間を、Zoom を利用したオンライン稽古として実施しました。また、対面稽古においても、短編作品ごとにチームを分け、稽古時間も区切ることで稽古場に滞在する人数や時間を制限しました。

昨年度までの活動と異なり大学生や社会人も出演者として参加したことにより、劇団活動をしている出演者が高校生にアドバイスを送るなど、今までにない世代間の交流もみることができました。

出演者たちは、田上氏やペレイラ氏の演出のもと、積極的に自分たちのアイデアを提案したり、出演者同士で相談を重ねるなど、作品をより良いものにするため協力していました。

また、7人のクリエイションスタッフは、演出助手、音響助手、衣装、制作、広報と様々な場面で出演者をサポートしながら、創作活動に携わることができました。

[稽古日程／場所]

オンライン稽古：令和2年12月7日(月)～11日(金)

対面稽古：令和2年12月12日(土)～22日(火)／ならまちセンター、音声館、中部公民館

舞台稽古：令和2年12月23日(水)～25日(金)／ならまちセンター

リハーサル：令和2年12月25日(金)19時～20時／ならまちセンター

[参加者]

オンライン稽古（出演者12人のみ）

7(月)	8(火)	9(水)	10(木)	11(金)	(延入日数)
11人	11人	11人	10人	10人	(53人日)

対面稽古（出演者12人＋クリエイションスタッフ7人）

12(土)	13(日)	15(火)	16(水)	17(木)	18(金)	19(土)	20(日)
16人	15人	15人	15人	15人	17人	16人	18人
22(火)	23(水)	24(木)	25(金)	(延入日数)			
17人	18人	18人	18人	(198人日)			



■ 「ならのまちと創る演劇」 本公演

12月26日（土）ならまちセンター市民ホールにて、「ならのまちと創る演劇」公演を行いました。短編3作品を上演し、約70分の上演時間となりました。

出演者やクリエイションスタッフにおいては、これまでの稽古の成果を観客の前で発表することができました。

【作品概要】

ならのまちと創る演劇（短編3作品）

その1 おっばい饅頭

作・演出：田上豊 エピソード提供：まんじゅうこわい

その2 うまいものがないところ

作・演出：FOペレイラ宏一朗 エピソード提供：桑理孝子、奈古英子、山口淳子

その3 ぜんざいマラソン

作・演出：田上豊 エピソード提供：西川みやこ

[日 時]令和2年12月26日(土)

13時開場、14時開演（上演時間約70分）

[場 所]ならまちセンター 市民ホール

入場無料／要申込（当日券なし）

全席指定

[観覧申込期間]令和2年11月24日（火）～12月16日（水）

[観覧申込者数]138人（93組）

[観覧者数]86人（うち関係者19人）

（公演における感染対策）

- ・ 客席は舞台前3列を空席とし、さらに前後左右は1席ずつ間隔を空け、108席（一般84席・関係者24席）を定員に設定し、全席を指定席とした。
- ・ チケット裏面には氏名・住所・連絡先を記入する欄を設け、入場時に回収した。
- ・ 開場時間を例年より30分早い開演1時間前とした。
- ・ 転換時は会場後方扉のみ開放し、空気の入換えを行った。
- ・ 例年行っているホワイエ展示及び出演者・スタッフ等によるホワイエお見送りを実施せず、早めの退場を促した。
- ・ 公演は動画撮影し、後日の配信を行った。



■ 公演動画配信

視聴期間：令和3年1月28日～3月31日

視聴方法：Youtube（申込者限定）

視聴者数：515人（2/15現在）

■ 活動の振り返り

出演者・クリエイションスタッフにはプログラム終了後のアンケートを実施し、本事業への参加が自身の成長や今後の活動にどのような影響を与えるかを確認しました。

自身の感じる変化としては、「本気でやる人の姿を学ばせてもらった」（高校生女子）、「演劇を通して奈良の魅力を発信する気持ちがより強くなった」（60代女性）、また今回スタッフとして参加してくれた青少年演劇OGからは「前回（参加時）の改善点も含めて成長できたので嬉しかった」という声も寄せられました。

演劇創作の魅力について訊ねた項目では、「世の中で役に立たない不利な個性が舞台では武器に出来る」（40代男性）といった意見や「日々成長し変化する様子から“演劇は生き物だ”と感じます」（大学生）といった意見がありました。



ラーニング・プログラム

グリーン・マウンテン・カレッジ

校長：小山田徹

平成 30 年度、京都市立芸術大学教授の小山田徹氏より提案され実施した当プログラムは、令和 2 年度も共有空間の獲得を目指し、参加者とともに対話を繰り広げる「学び合いの場」として、「食」を共通テーマにゲストを迎え、全 3 回実施しました。



【実施概要及び各回参加者数】

参加者数：165 人

日時・場所	テーマ	ゲスト	参加者数
11 月 15 日（日） 18 時～20 時 ならまちセンター芝生広場	「共に食す」	上田 假奈代	43 人
11 月 29 日（日） 18 時～20 時 ならまちセンター芝生広場	「拡大食卓」	鷺田 清一	30 人
12 月 13 日（日） 18 時～20 時 ならまちセンター芝生広場	「握り石」	EAT&ART TARO 西尾 美也	開催中止 (動画視聴 92 人)

[グリーン・マウンテン・カレッジ校長 小山田徹 プロフィール]



1961 年鹿児島生まれ、京都府在住。美術家／京都市立芸術大学美術学部教授。京都市立芸術大学日本画科卒業。1984 年大学在学中に友人たちとパフォーマンスグループ「ダムタイプ」を結成。主に企画構成、舞台美術を担当し、国内外の数多くの公演に参加。ダムタイプの活動と平行して 1990 年から、さまざまな共有空間の開発を始め、コミュニティセンター「アーツケープ」「ウィークエンドカフェ」「コモンカフェ」「祈る人屋台」「カラス板屋」などの企画を行う他、コミュニティカフェ「Bazaar Cafe」の立ち上げに参加するなど、さまざまな友人らと造形施工集団を作り共有空間の開発を行う。

ラーニング・プログラム

平田オリザの表現ワークショップ

—演劇メソッドでコミュニケーションのヒントをつかむ—



毎回、参加者満足度の高い平田オリザ氏のワークショップは、感染対策を講じた、通常とは違う形での開催となりました。1回3時間の内容を2時間に短縮、プロジェクターを使った座学中心として、参加人数は会場定員の半分以上としました。

募集に際しては今回応募者が大幅に増えて抽選を実施。講師の了解を得て、落選者に向けてワークショップのライブ動画配信を行いました。

プログラム参加者数：172人

午前の部／10時～正午	20人
午後の部／13時～15時	15人
計	35人

[オンライン]

午前の部・ライブ動画視聴者	68人
午後の部・ライブ動画視聴者	69人
計	137人

※アーカイブ配信視聴を含む

[日 時]令和2年10月3日（土） 午前の部 10時～12時、午後の部 13時～15時

[会 場]ならまちセンター 多目的ホール

[参加者]午前の部 20人（欠席3名）、午後の部 15人（欠席2名）

[内 容]

<前半>

- ① 出されたお題（好きな色、行ってみたい国等）に対して、同じ答えを持つ人同士で集まる“声出し”ゲーム → マスクはしたまま、張り上げない声で行う。
- ② 身体を使ったゲーム → 背中合わせなど最小限の接触にとどめる。
- ③ 1～50番までのカードを持ち、自分に近い番号の人を探す“共有イメージ”のゲーム。

<後半>

- ④ プロジェクター・ホワイトボードを使った座学

→ 「他者理解」やコロナ禍の今について等

- ・ これからの時代、コンテクストを理解し、シンパシー（同情）ではなく、エンパシー（共感）の力を培うことが大切。

- ・新型コロナウイルスの流行は、日本は死者数が少ないが、人身が荒廃してしまったように感じる。コロナは弱者のいない災害だったのではないか。
- ・他者理解のツールとして、ここをつなぎとめるのが文化芸術の役割。ヨーロッパでは、劇場は社会と繋がる教会の代わりの場所になっている。文化芸術は、社会と繋がっていくための生命維持装置。

【ライブ動画配信】

事務局スタッフによるライブ撮影と配信を行いました。一部音声途絶等はあったものの、午前・午後とも無事配信を行えました。



広報活動について

■ 広報コーディネートについて

本事業の広報活動については、一般社団法人はなまるにコーディネートを依頼し、ライターやSNS等にて行いました。

■ ロゴについて

広報媒体に掲載するロゴマークについて作成しました。

ロゴデザイン：久保元気（Butter）



■ 広告物

・ フライヤー

① EAT&ART TARO「動く石」フライヤー（令和2年11月27日から配布開始）

仕様：A4 サイズ両面 カラー

内容：「動く石」について

部数：5,000 部

② ならのまちと創る演劇フライヤー（令和2年12月1日から配布開始）

仕様：A4 サイズ両面 カラー

内容：演劇公演観覧募集について

部数：5,000 部

③ グリーン・マウンテン・カレッジフライヤー（令和2年10月30日から配布開始）

仕様：A4 サイズ両面 カラー

内容：グリーン・マウンテン・カレッジ全3回について

部数：5,000 部

（主な配布先）

市関係施設／美術館・美術団体等／報道関係／大学・高校・中学等／

アート関係団体／イベント関係者／会場設置／関係者・出演者等／その他

・ のぼり旗 13 本、ポスター（動く石、ならのまちと創る演劇）

のぼり・ポスター：各プログラム会場にて掲出

■ インターネットを利用した広報

- ・ Facebook
フォロワー数（令和 3 年 2 月時点）：3,146 件
Facebook 広告：3 件
- ・ Twitter
フォロワー数（令和 3 年 2 月時点）：939 件
- ・ Instagram
フォロワー数（令和 3 年 2 月時点）：293 件
- ・ WEB サイト：奈良市アートプロジェクト「古都祝奈良」（<https://kotohogunara.jp/>）
平成 30 年 9 月に公式サイト開設、令和 2 年 10 月に令和 2 年度プログラム内容に更新
- ・ WEB サイト：「EAT&ART TARO 動く石」特設サイト(kotohogunara.jp/ugokuishi/)
令和 2 年 12 月に開設

■ プレスリリース・メールニュース

- ・ 令和 2 年 11 月 24 日／市長定例記者会見
現代アートプログラム招へい作家 EAT&ART TARO 氏同席のもと、令和 2 年度企画について市長会見を行った。
- ・ 市政記者クラブへ報道資料提供
令和 2 年 8 月 11 日／「平田オリザの表現ワークショップ」参加者募集
令和 2 年 9 月 8 日／「ならのまちと創る演劇」エピソード募集
令和 2 年 9 月 29 日／「平田オリザの表現ワークショップ」取材依頼
令和 2 年 10 月 30 日／グリーン・マウンテン・カレッジ 取材依頼
令和 2 年 11 月 24 日／奈良市アートプロジェクト「古都祝奈良 2020-2021」
・ EAT&ART TARO 「動く石」開催について
・ その他のプログラム「ならのまちと創る演劇」
・ その他プログラム グリーン・マウンテン・カレッジ
令和 2 年 12 月 18 日／「ならのまちと創る演劇」ゲネプロ・本公演 取材依頼
- ・ メールニュース
アンケート等の回答で、古都祝奈良情報の提供を希望するとした方に送信
（令和 2 年 8 月 27 日、9 月 14 日、10 月 23 日、12 月 2 日、令和 3 年 2 月 1 日）

■ メディア等掲載実績

掲載日	掲載物	内容
令和 2 年 8 月 23 日	朝日新聞	平田オリザさん講師に 表現学ぶ / 参加者募集
令和 2 年 9 月 10 日	読売新聞	奈良市アートプロジェクト「平田オリザの表現 WS」
令和 2 年 9 月 24 日	朝日新聞	「ならのまちと創る演劇」エピソード募集
令和 2 年 11 月 15 日	毎日新聞	ならまち中心部 火を囲み語らう（GMC）
令和 2 年 11 月 19 日	朝日新聞	グリーン・マウンテン・カレッジ（11/29,12/13）

令和2年11月27日	AXIS (ウェブメディア)	奈良の「石」に着目する食の体験型アートプロジェクト「動く石」開催
令和2年12月3日	朝日新聞	「ならのまちと創る演劇」観覧募集 奈良市アートプロジェクト「動く石」
令和2年12月10日	Tokyo Art Beat (ウェブメディア)	石とお菓子を交換しませんか? : 古都祝奈良で EAT&ART TARO が「石の菓子店」を出店中
令和2年12月11日	毎日新聞	石で支払う菓子屋さん

※報道資料については、広報戦略課を通じて PRTIMES に掲載

■ ならのまちと創る演劇当日配布用プログラム作成

- ・ A4 白黒 4 頁 150 部
- ・ A4 カラー両面 150 部 (クリエイションプログラム 広報チームが制作)

■ 奈良市広報誌「奈良しみんだより」での告知 (約 163,000 世帯へ各戸配布)

9 月号	・ 平田オリザの表現ワークショップ (10/3) 参加募集
11 月号	・ グリーン・マウンテン・カレッジ 開校 ・ 「ならのまちと創る演劇」出演者募集
12 月号	奈良に暮らす人たちと創り上げる“美術”“演劇”“学び”のプログラム ・ EAT&ART TARO 「動く石」開催案内 ・ 公演「ならのまちと創る演劇」観覧募集 ・ グリーン・マウンテン・カレッジ第3回 開催案内

■ 動画配信等

- ・ 奈良市アートプロジェクト「古都祝奈良」YouTube チャンネル
(2 月 16 日現在)

公開日	タイトル	再生数
令和2年10月3日	平田オリザの表現ワークショップ (午前の部・午後の部) ライブ配信+アーカイブ配信	137 回
令和2年12月4日	EAT&ART TARO 「動く石」スペシャルインタビュー	72 回
令和2年12月16日	「石の菓子店」のコンセプト動画 (会場での再生用動画)	24 回
令和2年12月17日	グリーン・マウンテン・カレッジ 第3回「握り石」録画配信	92 回

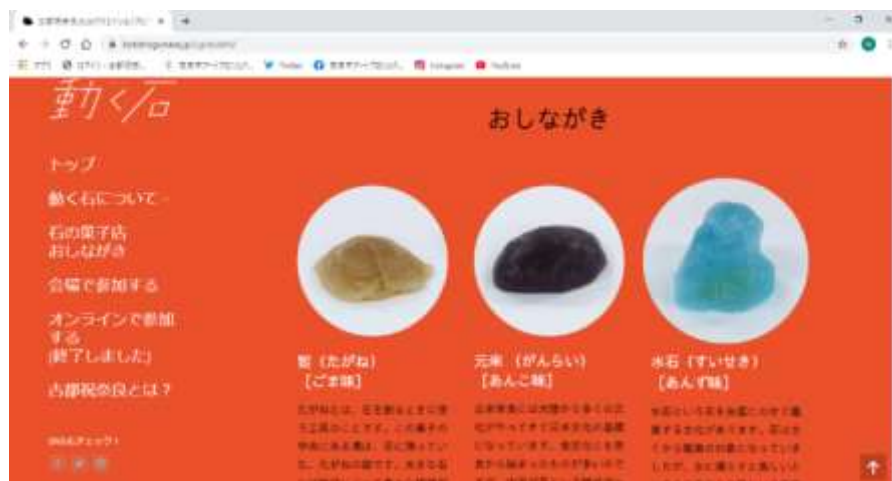
- ・ Facebook による動画投稿 (2 月 16 日現在)

公開日	タイトル	再生数
令和2年12月16日	「石の菓子店」のコンセプト動画【Facebook 広告】 (会場での再生用動画)	2,226 回

<広報関係写真>



「古都祝奈良」公式サイト



「動く石」特設サイト



市長定例記者会見



作家インタビュー

成果と課題

■ 事業全体

- ・ 会場への来場者数は、昨年度 34,147 人であったのが、今年度は 890 人と、33,257 人の減少に対して、今回から実施したオンラインでの参加（ウェブコンテンツ閲覧、動画視聴等）は 7,790 人であった。来場者数の減少の理由は、新型コロナウイルス感染症の影響と、前年度（北澤潤「You are Me」）が市内複数会場かつ公共空間における展示であったのに対し、EAT&ART TARO「動く石」は店舗内での展開であったため入店した人を来場者としてカウントしたことにある。
- ・ 今年度はすべてのプログラムにおいて「食」をテーマにした。新型コロナウイルス感染症の感染拡大による大きな影響を受けたテーマであり、人々の生活に密接に関わるもので、各プログラムでは作家やプログラムディレクターが様々なアプローチで「食」を表現することができた。
- ・ これまで美術と演劇を中心に年度内に多様なプログラムを展開してきたが、「古都祝奈良」としての一体性に欠けるところがあり、年度ごとにメインプログラムの分野を定める等の検討を行いたい。

■ EAT&ART TARO「動く石」

- ・ これまでの美術プログラムは、西尾美也プログラムディレクターのディレクションにより「生活」に着目して展開してきた。今年度の美術プログラム EAT&ART TARO「動く石」についても、身近なテーマで主体的に参加できるものであり、これまでの事業展開にふさわしいものであった。
- ・ 春日大社参道という奈良の魅力を感じられる場所でアートを発信することができた。また、新型コロナウイルス感染症の影響により休業している飲食店を会場にするなど、社会課題に対するアートの役割についても示唆に富むものであった。
- ・ 感染症対策の一環で本企画の特設サイトを制作し、「石の交換」もオンラインで参加できるようにした。また、会場に来られた方が東京にいるアーティストとウェブ会議システムを使用しコミュニケーションを取れるようにするなど、様々な場面でオンラインに対応できるようにした。
- ・ アンケート（QR コード配布による任意の Web 回答）によると、奈良市外、県外からの来場者も一定数来場、ほぼ全員が開催情報を取得して訪れていた。主な取得先は関係者からの口コミ、ツイッター、インスタ、特設サイト等だが、普段からアートイベントに足を運ぶ美術ファンが多く、当プログラムへの満足度も肯定感も高い結果となった。

■ ならのまちと創る演劇

- ・ コロナ禍における演劇創作は感染症対策をはじめ困難なことも多かったが、出演者・クリエイションスタッフの高い意欲や、観劇申込み数の多さなどから、ニーズの深さを見て取ることができた。

- ・ 93 組 138 人の一般申込をいただいたが、感染症対策のため客席を大幅に制限したため、多くの方の観覧をお断りすることとなった。当日公演を観覧できなかった人に対しては、公演動画の撮影及び配信を行うことで対応した。
- ・ 出演者を中高生に加え、大学生や社会人にまで広げたことにより、社会人劇団で活動する人が中高生に情報を提供するなど、相互の活動の幅を広げる機会にもなった。
- ・ 技術スタッフの助手などで、舞台を支えるクリエイションスタッフを「青少年と創る演劇」の過去参加者より募り、7 人が参加。OB・OG が事業に携わることで、継続実施していることの効果がみられた。
- ・ 公演動画配信も好評で演劇の新しい楽しみ方を提案することができた。一方で映像配信を前提にした場合、劇中で使用する音楽や画像の権利など、クリアすべき案件が多くなる。

■ グリーン・マウンテン・カレッジ

- ・ 第 2 回（ゲスト：鷺田清一氏）は会場に来ることができなかったため、リモートでの参加となった。小山田氏からゲストがリモートであっても企画の質が損なわれることはないとの意見をいただき、今後もゲストのリモート参加の可能性が広がった。ただし、テレビモニターや音響、通信設備など、環境整備の点で費用がかさむことが課題である。
- ・ 第 3 回は新型コロナウイルス感染症の警戒レベルがステージ 3 になったことから、会場での開催を中止し、ゲストによるトークを後日配信とした。たき火を囲む企画であり、多人数を受けることができる企画でないため、後日の動画配信は広報面からも効果があり、次年度以降も実施を検討したい。

■ 平田オリザの表現ワークショップ

- ・ 他プログラム同様に、参加人数を減らし、2 回実施にするなどで感染症対策を行った。定員を超えたため参加をお断りした方に対してはライブでの動画配信を視聴いただいた。体験することを重視したワークショップの場合、動画視聴のみでは満足度は得られないため、今後は双方向性を持たせるなど、オンラインであっても体験の質が損なわれないようワークショップの実施方法を考える必要がある。
- ・ 全体の 64% が市内からの応募であったが、13% あった県外応募者には、愛知県や島根県隠岐の島の方からの応募もあった。
また、年配者の応募が増えており、昨年度わずか 6% だった 50 代～70 代が 31% に上昇。特に 70 代は、昨年度 0 人から今回は 9 人となり、多くが開催情報を新聞記事から取得されていた。
- ・ アンケートからは、“演劇経験のない方”の参加が演劇経験者を上回り、介護や研究、映画制作など自らの活動に活かしたいと応募された方など多様な背景を確認した。

《資料編》

(1) 令和2年度プログラム 参加者数等まとめ

総参加者数（来場+オンライン）	8,680 人
会場来場者数	890 人
オンライン参加者数	7,790 人

ウェブ閲覧 7,031 人 動画視聴 744 人
その他 15 人

■ プログラム別参加者数

① EAT&ART TARO「動く石」 参加者数：7,708 人

「鶴の茶屋」来場者	677 人
*うち「鶴の茶屋」石の交換参加者	*327 人

来場

[オンライン]

ウェブサイト閲覧者数（12月）	7,031 人
*うちオンライン石の交換者	*32 人

② 「ならのまちと創る演劇」 参加者数：635 人

出演者※	12 人
クリエイションスタッフ※	7 人
観覧者	86 人
計	105 人

来場

※創作活動（9月～12月）延人日数：247 人日

[オンライン等]

エピソード応募者	15 人
公演3作品動画視聴者（2/16現在）	515 人
計	530 人

③ グリーン・マウンテン・カレッジ 参加者数：165 人

11月15日（日）「共に食す」	43 人
11月29日（日）「拡大食卓」	30 人
12月13日（日）「握り石」	（開催中止）
計	73 人

来場

[オンライン]

公演動画視聴者	92 人
---------	------

④ 平田オリザの表現ワークショップ 参加者数：172 人

午前の部／10時～正午	20 人
午後の部／13時～15時	15 人
計	35 人

来場

[オンライン]

午前の部、・ライブ動画視聴者	68 人
午後の部・ライブ動画視聴者	69 人
計	137 人

※アーカイブ配信視聴を含む

■ 属性（アンケート結果より／アンケート総数 107 件）

性別							
男性	21.5%						
女性	78.5%						
年齢							
10 代	20 代	30 代	40 代	50 代	60 代	70 代	80 代以上
14%	13%	13%	26%	22%	7%	5%	0%

(2)「ならのまちと創る演劇」出演者・スタッフ一覧

[作・演出・出演]

●作品その1「おっぱい饅頭」

作・演出：田上豊（田上パル）

エピソード提供：まんじゅうこわい

<キャスト>

高校生1…松岡夏来

高校生2…市山花音

高校生3…ロット

舞 妓 …大野菊愛

デッサンをしている人…西元完代

●作品その2「うまいものがないところ」

作・演出：FO ペレイラ宏一朗（プロトテアトル）

エピソード提供：桑理孝子、奈古英子、山口淳子

<キャスト>

中村奈緒子…おさみき

中村ひかる…南るな

山本奈緒子…岡山弥美

山本一男 …太田裕介

山本綾子 …西川雅子

中村春樹 …井上大輔

●作品その3「ぜんざいマラソン」

作・演出：田上豊（田上パル）

エピソード提供：西川みやこ

<キャスト>

少女…藤村葉那

餅…井上大輔

小豆…岡山弥美

自称お母さん…西川雅子

追われている高校生1…松岡夏来

追われている高校生2…市山花音

鹿神様…大野菊愛

馬神様…西元完代

サングラスの男…ロット

奈緒子…おさみき

ひかる…南るな

聖武天皇…太田裕介
死体運び…西元完代
スパイダーマン風の男…ロット
遣唐船の人たち…出演者一同
ぜんざいの餅達…出演者一同

[クリエイションスタッフ]

演出助手・アンダースタディー
…東和佳奈、西田瑞希
企画・広報 …秋月結衣、匠夏歩
音響助手 …小阪希空
衣装助手 …植村真央
大道具 …福田健二

[スタッフ]舞台監督・美術…西野俊大

舞台監督補佐…北方こだち
音響…廣岡美祐
照明…海老澤美幸 (Licka)
映像…吉光清隆 (PLAYSPACE)
映像オペ…上原優香
衣装…山口夏希
舞台映像撮影編集…堀川高志
(kutowans studio)
舞台映像撮影…竹田和哲
当日運営…一般財団法人奈良市総合財団
(ならまちセンター)
スペシャルサンクス…エピソードご提供いただいた皆様

(3) グリーン・マウンテン・カレッジ各回レポート

令和2年11月15日(日) 18時~20時

「共に食す」

上田 假奈代(詩人・詩業家)

× 小山田 徹(グリーン・マウンテン・カレッジ校長)



焚き火がパチッパチッと音を立てて、火の粉が美しく宙に浮かびます。小山田さんの挨拶から、3年目のグリーン・マウンテン・カレッジは開校しました。

「このような状況の中で、開催してくれた奈良市に感謝します。例年より、皆さん距離を取ってやりましょう。」

ティピーテントの下、焚き火を囲むスタイルはコロナ前から変わらず、検温や手指消毒の実施、参加者同士の距離をいつもより広く取っての開催となりました。初回のゲストは、上田假奈代さん。奈良県の大淀町出身で、詩人。

「詩人って、フランスの辞書に役立たずって書いてるんですよ。私自身、生きづらい自覚があって、アートのNPOを立ち上げて18年立ちました。西成という地区でココルーム(<https://cocoroom.org/cocoroom/jp/>)を立ち上げ、場作りと人との関係づくりをやっています。困っている、助けてほしいと訴えることも表現です。助けてほしいという気持ちを言える場所をつくりたいと思っています。他にもココルームでは、釜ヶ崎芸術大学という学びの場をはじめて、年間100講座開催しています。去年は、西成のおっちゃんたちと子どもや若者700人と井戸を掘りました。」

「ココルームは考える示唆を与えてくれる場所だね。」

ココルームの価値・魅力について参加者全員が共有したところで、全体テーマともなっている「食」について、小山田さんが話しはじめました。

「家庭内感染のニュースがあると、家族でご飯を食べるなど言われているように感じるんだ。一緒にご飯を食べるということをやめると、別の問題が出てくるんじゃないかな。誰かと食を共にするということを、やめてはいけない。別の方法を考えなければならないと強く思います。ココルームはアバンギャルドな場所なので、食を共にするという行為を無くさずにいてほしい。そう思って、今回上田さんと呼んだんだ。」

「人と一緒に御飯を食べるのは楽しい、その感覚は大切。ココルームでは皆でご飯を食べる。ご飯を食べてると、ぽろりと、切実なことを話してくれる気がするんです。人が関係を始めるための場所として、「食」は重要ですね。ご飯を食べて聞いた意見のほうが決定的に捉えられて研究もあるみたいですよ。焚き火も同じような効果があるように思います。」

「うちでも、スタッフや学生と一緒に御飯を食べるということをやっているけれど、すごく良いミーティングの場になるんだよね。ご飯って何かを柔らかくしてくれる。」

「ココルームでは、大皿料理から自由にお箸でおかずを取っていただくスタイルです。破棄しない、ということをこの18年間かなり心掛けていて。大皿だったら、残ったら次の日に回せるんです。けれど、コロナで大皿料理での提供は感染防止のためには避けた方がよい。」

人と人の密な交流を妨げるのも、新型コロナウイルスの脅威。人間の根源的な営みのひとつである「食」への影響も、例外ではありません。

「この間それをどうしようかという話をココルームでもしました。食品ロスへの思い、みんなで食べることの大切さを確認し、結果、このまま大皿での提供を続けようとなった。そしてさらに、今回を機に、料理で出る皮などゴミの部分をコンポストに入れて土に返すことを始めました。今、大阪大学と連携し、コンポストステーションを作って、興味のある飲食店にもご協力いただこうと考えています。いつか、釜ヶ崎のゴミで釜ヶ崎に花が咲いたらいいな、とファンタジーなことも考えたりしています。」

「コロナで大きなチャレンジの機会をもらっている気がします。東日本大震災のとき、社会が変わるきっかけになると思って自分も色々実践しましたが、根幹の部分はあまり変わらなかった。震災では、被災地と他でリアリティの強弱があったけれど、今回のコロナは皆の生活に均等に降り掛かってきているよね。皆が色々なことを考えるきっかけになっていくんじゃないかな。」

みんなが大変な状況だけれど、変わっていくチャンスにしようよ。小山田さんの言葉から、そんなポジティブなメッセージを受け取ったような思いがしました。

「一回食卓を囲むと関係が深くなる。何回も重ねていくと、疑似家族になっていく可能性がある。次回ゲストの鷺田清一さんは、そういった拡大家族と食卓の関係について語られています。なので、次回は「食」のもたらす拡大・拡張・つながりの役割について話したいと思っています。」

次回への期待が高まりつつ、3年目のグリーン・マウンテン・カレッジ 第1回は盛況のうちに幕を閉じました。（文：飯村有加／一般社団法人はなまる）

令和2年11月29日（日）18時～20時

「拡大食卓」

鷲田 清一（哲学者）※リモート参加

× 小山田 徹（グリーン・マウンテン・カレッジ校長）



「こんばんは。」

ゲストの鷲田清一さんが、京都にある自宅の一室から焚き火の元集まった皆さんに呼びかけます。

「鷲田さん、こんばんは。今日は満月で綺麗な夜ですよ。」

ディスプレイの隣に座る小山田さんが、月を眺めながら返答しました。グリーン・マウンテン・カレッジ、初めてのゲストオンライン出演は穏やかな空気が始まりました。

「今日のゲスト、鷲田清一さんは私の勤める大学の元学長でした。私が長年、多大な影響を受けた方です。今回、恐る恐るトークゲストにお声掛けしたところ、ご快諾いただきました。今回のテーマは「大きな食卓」です。以前、大学で立ち話したときに「拡大家族」が「拡大食卓」であるという話をしましたが、覚えていますか？」

「覚えていません。」

鷲田さんのカラッとした返事に、会場では笑いが起こります。

「今回「食」をテーマに選んだのは、コロナの状態で、人が集まって食事をするということが大きく変化したことがきっかけにあります。鷲田さんの周りでも変化はありますか？」

「すごくありますね。私自身、一緒に食事をしてお喋りすることが一番楽しみなんですけれど、機会が激減して寂しいです。」

「大学の学食が閉まったままなんですよ。」

「芸大（京都市立芸術大学）に勤めるようになってびっくりしたひとは、みんな驚くほどよく食べることです。女性率が高いのに、油ものやボリュームあるメニューが多い。大学食堂が閉じているのは、学生たちのお腹にとって苦しいことだなあ。」

学生たちの現状に想いを寄せながら、鷲田さんは続けます。

「食事って、人類が昔からしていることです。猿はその場で食べますが、人間は家族や仲間の元に持って帰ってきて食べていました。しかし、ファーストフードが完備され、一人で食べることが当たり前になってきたよね。食事を済ます、という言い方になっていることを寂しく感じます。」

「それをコロナがさらに加速させたように感じますね。そんな状況の今、ともに食事をするものの効果について、話したいと思っています。鷲田さんの学生の頃はどんな食事でしたか？」

「大学の頃はお金が無いので、昼は大学食堂で、夜は下宿で友達と鍋を食べたりしましたね。私は本当に喋るのが好きで、空いている時間帯のときは大学食堂で、つい、調理のおばさんとお喋りするんです。それで、おばちゃんと仲良くなると、チャーシューを1枚サービスでつけてくれたりして。そういった得意技を得ていました。一人でラーメン屋いっても、昔からカウンターに座って、カウンター越しに話すのが好き。誰かに作ってもらっているという感覚があると美味しいよね。」

「僕もカウンターに座るのが好きなんだけど、今茹でているのは僕のかな？とか色々見ちゃいます。」

「今、ラーメン屋で誰かに作ってもらっているという感覚があると美味しいと感じるという話があったけれど、面白い話を思い出しました。霜山徳爾さんという精神医学の先生の『人間の限界』という著書があるのですが、そこに、赤ちゃんがお腹減っているはずなのに、哺乳瓶の温度が0.5度違うだけで飲まないという話があるんです。それは何故かという、今日のお母さんの気持ちが自分に向いていないということを感じて、抗議の意味で飲まないんですって。人間ってすごいなあと思います。作ってもらってる実感があると美味しいというのは、乳飲み子から実感があるんだなと。温かいものが食べられたときって、本当に皆笑顔になる。赤ちゃんが温かいおっぱいを飲むときのプリミティブな喜びは、死ぬときまで続くんです。」

「食」を一緒にすることの大切さについて話す中で、鷺田さんが「あっ」となにかに気が付いたように、表情を変えました。

「食の役割について、危ないと思うこともあります。過去、ドイツのアイントップで大規模な炊き出し運動がありました。一つの大きな鍋に色々な食材を入れて、食料のない人に配る活動です。ヒトラーも政治家も、皆一緒に参加していました。炊き出しは大切なボランティア活動ですが、食が絡むと、動員装置という裏の意味になってしまう可能性も現れてくるので、気をつけなければいけません。食べるって怖いことでもあります。食の権利を握るということは、他人の生存権利を握っているということでもあります。飯くわさんぞ！は立派な脅しになりますよね。貧困など食の問題は、支え合いが大切ですが、同時に暴力的な側面もありえます。皆、食糧難になっていく時代になったときは、特に気をつけなければいけません。」

催す側の意識で、素晴らしい効果を出すことにも、暴力的で支配的な効果を出すこともできる「食」すという行為の重要さを、改めて知ることになりました。

最後に会場からの質問に答えて、鷺田さんは和やかな表情でオンライン通信から退出されました。

「食を扱う上で気をつける点など、非常に示唆に富んだ内容でした。私も、食の場の設えをするときには意識をしなければならないと思いました。次回は、今回の古都祝奈良美術プログラム招待アーティスト EAT & ART TARO さんと美術プログラムディレクター西尾美也さんと開催します。これ以上、コロナが猛威を振るわないことを願います。」

オンラインを通して世界中からゲストを呼べる、そんな新しい可能性を感じながら、2回目のグリーン・マウンテン・カレッジは終了しました。

(文：飯村有加／一般社団法人はなまる)

令和2年12月13日（日）18時～19時

「握り石」 ※開催中止／トーク収録公開

EAT&ART TARO（招へいアーティスト）

× 西尾 美也（美術プログラムディレクター）

× 小山田 徹（グリーン・マウンテン・カレッジ校長）



第3回「握り石」は、新型コロナ感染拡大により奈良市の警戒レベルがステージ3に引き上げられたため通常開催が中止となり、ゲスト2人と小山田さんのみのトークを収録、古都祝奈良ウェブサイト、トピックス頁にUPしました。

小さな火を囲む3人だけのトークは、まず西尾ディレクターから、今回の美術プログラムでEAT&ART TAROさんを招へいした思いから始まりました。

「過去3年、奈良市アートプロジェクトの中心的なテーマが“生活”でした。コロナ禍で生活を見直す中、アートに何ができるかを問われていると感じ、誰にとっても根源的な「食」をテーマにしました。TAROさんはARTの手法で食べることの今までと違った状況を作り出す方。コロナはマイナスの意味での状況変換。TAROさんだったらこの状況でどんなプロジェクトを仕掛けるのか、一緒に奈良で考えてみたいとお誘いしました。」

そして仕掛けられたのがこの2日前、12月11日より始まった「動く石」。石と石を模した菓子の交換というユニークなお店の構想は、TAROさんが奈良をリサーチする中で産まれました。

トークに先立ち春日大社参道の「鶴の茶屋」にある「石の菓子店」を体験した小山田さん。「たまらんです。実は私も石好きで、こじらせて洞窟探検までやってます。」

今回のテーマ「握り石」は、石を握りながら飲むバーという小山田さんの作品にちなみです。この日小山田さんは大きめの石「抱石（ほうせき）」を持参。3人それぞれ好みの抱石を膝に乗せてのトークです。TAROさんは話します。

「お金じゃないやりとりをしたいというのがあったんです。何年も持っていたとか、買ったとか、色んな石が集まっています。中には小さい子が近くで拾ってきたものもあって、最初は他と比べて価値が低いような気がしてどうしようかなと思ったんですが、これが意外とカッコいいんですよ！」

わかる！と小山田さんが即答。瞬時に選ぶときに価値は作られ、それは色んなものの価値を考えると示唆を与えてくれると応じます。

TAROさんの価値についての話は続きます。

「一個人が持っている価値と交換できるのがやっていて楽しいし、多分交換に来た人も買ったものとは違う何かを持って帰ってくれるんじゃないかと。」

西尾さんからは今回のプロジェクトの特徴が語られました。

「空間デザインとか VI とか色んなクリエイターにコラボレーションという形で関わってもっています。それと「鶴の茶屋」というロケーション。一の鳥居から石を抱えて来ると新鮮な気持ちも演出される。色んなものに恵まれてすごく良い形で実現したなど。」

ロケーションの素晴らしさは小山田さんも言及。

「参道横に石を持ってくるってプリミティブな感じがあるね。なんか太古の部分に触れている気がして。そういう古さ、深さみたいなものが同じように太古からの営みとして無意識にやっている「食」と繋がる感覚を持ちました。」

TARO さんは「食」の楽しみの根源的なところは、例えば石に触って気持ちいいとか、生物の感覚としてそれらは近いと思うと語り、小山田さんからは、自分が持ってきたものがシェアされる、思い出がさらされるのは実は心地いいのかもしれないとの話が。

「料理を作ってみんなで食べるのって気持ちいいですね。」

と TARO さん。テーマの「食」と「動く石」の繋がりへの理解が深まりました。

小山田さんはさらにこのプロジェクトを“優しい表現”という言葉で表しました。それに応じて TARO さんからは、コロナ禍で自らが思ったことが語られます。

「“優しいお店”みたいなものを考えていて。例えば美味しい野菜が、農家さんが大変な思いをして作ったものではなく、ちゃんと休みをとって作ったものあって欲しいと。生産者や料理人がどう楽をできるかっていう世の中にならないかなって思ったんです。」

料理人として活動を始めた TARO さんならではの視点に小山田さんは、今まで負荷が掛かっていたところに目が向き、そういう時こそクリエイティブな何かが提案や疑問にするタイミングであり、今回の企画にはそれが埋め込まれていると評価。2 人の話に静かに耳を傾けていた西尾さんが、おもむろに口を開きました。

「コロナをきっかけに色んなことに気付いたり、変わらなければと考える人が多いと思いますが、変わる方法をどれだけ知っているかがまた問題。アーティストはまさにそれを追求している人たちで、考え方などがヒントになるのではないかと思います。」

小山田さんからはさらにアーティストの活動について、

「僕らがやろうとしていることは 10 年後、20 年後の“未来の当たり前”。今は結果も出ないし反発も違和感もある。繰り返す中で表現の中とか、感覚、感情、概念などが普遍化していく。例えば今“優しい”に共感者は沢山いるがどうやればいいのか分からない。そういうものを何年もこねていると当たり前になって社会の中に組み込まれていく。そしてまた次の敏感な人たちがこねていく、そんな繰り返しを続けている感じがあるね。」

そして小山田さんは、「食」には人を穏やかにしながら変えていく力があると言います。西尾さんは今回の TARO さんのプロジェクトは未来に繋がる学びの場であり「日常の革命」という言葉を使ってそれを成すための学びの大切さを語り、そして TARO さんが、「穏やかな革命が動き出そうな気がしますよね。」

と笑顔で応じました。そんな 3 人のやり取りに、コロナ禍で鬱屈する世界から未来を見

据えた、ささやかな希望を見た気がしました、

石たちの未来についても話がありました。

「僕のコレクションにさせてもらおうかなと。不思議なものを手に入れてしまったなと。」
嬉しそうな様子の TARO さんに、「宝だね」と小山田さんが応じました。

最後に西尾さんから、今回のプロジェクトはこれまでと違い、コーディネーターや施工業者、彫刻家の方など、奈良で活動されている方々の協力で創り上げられたことが語られ、小山田さんからは、奈良のベースにある穏やかさ、急がない感じは、これからの世の中のメインではないかとの言葉がありました。

奈良の持つポテンシャルが after コロナの指針となる？かもしれない予感のうちに、今年度のグリーン・マウンテン・カレッジは締めくくられました。

(4) 令和元年度事業計画

奈良市アートプロジェクト「古都祝奈良」事業趣旨と令和2年度事業について

奈良市アートプロジェクト「古都祝奈良」の事業趣旨

東アジア文化都市の趣旨を引継ぎ、現代社会がもつ様々な課題や事柄、今後、未来に対して、奈良が訴えていくべきこと、奈良がすべきこと、奈良だからできることを、掘り下げ考える機会とし、文化（アート）を通じて、**新たな価値の創造**につなげる。

古都祝奈良 2017-2020
での取り組み



「体験」

チェ・ジョンファ作品におけるワークショップ
北澤潤作品における「創造する主体」
グリーン・マウンテン・カレッジにおける学び合い
青少年と創る演劇における部活動の枠を越えた創作活動

体験者の想像性／創造性をさらに重視した市民が主役のアートプロジェクト

「アートは鑑賞するもの」という先入観への問いかけ

アートプロジェクトを通じた「新たな価値の創造」へ

令和2年度事業についての方針

- ・ 国内外での新型コロナウイルス感染拡大をうけて、各プログラムでは感染防止対策を徹底し、内容のオンライン化などにも対応しながら企画を推進します。
- ・ 新型コロナウイルスの感染状況によっては、プログラムの内容変更や延期・中止を判断します。
- ・ 新型コロナウイルスの影響を大きく受けた日々の生活のあり方について、「アート」という方法を通じて見つめなおすプログラムを展開します。
- ・ 地域とアートをつなぐ「地域コーディネーター」と共に、事業の企画や広報、運営において協働を進めます。

事業概要

事業名：奈良市アートプロジェクト「古都祝奈良 2020-2021」

プログラム一覧：

- ・ 食をテーマにしたアートプロジェクト（プログラム名調整中）
参加アーティスト：EAT&ART TARO
プログラムディレクター：西尾美也
- ・ 演劇創作&公演（プログラム名調整中）
プログラムディレクター：田上豊
- ・ グリーン・マウンテン・カレッジ
校長：小山田徹
- ・ 平田オリザの演劇ワークショップ
講師：平田オリザ

地域コーディネーター：一般社団法人 はなまる

食をテーマにしたアートプロジェクト（プログラム名調整中）

EAT&ART TARO は、芸術祭や地域アートプロジェクトを主な活動舞台に、作品を発表してきました。数々のプロジェクトを通して、「食べる」という行為が単純な生命維持活動なのではなく、状況やコミュニケーションに左右されるものだということを参加者に実感させます。

新型コロナウイルスの感染拡大により私たちの日々の営みは大きく変容せざるを得ない状況に陥りました。「食べる」という行為もそのひとつです。コロナ禍を経験した今、食に関するアートプロジェクトを展開することで、私たちにとって「食べる」ということの意味について問い直します。

<プログラム案>

□ 夕飯コンシェルジュ／EAT&ART TARO

障害のあるなしや家庭環境、働き方、料理技術などによって、何をどのように食べるかについて悩む人は多いと思います。《夕飯コンシェルジュ》は、そうした誰にとっても日常の悩みである夕飯について、管理栄養士などで構成されるコンシェルジュとのコミュニケーションを通して一緒に考えるプロジェクトです。

□ その他プログラム／EAT&ART TARO（調整中）

アーティスト：EAT&ART TARO（いーとあんどあーと・たろう）

全国各地のアートイベントや地域コミュニティで食を通じたアート活動を展開する現代美術作家。瀬戸内国際芸術祭では、「島スープ」（2013）、「讃岐の晩餐会」「ALL AWAYCAFE」（2016）で多くの人々に地域の味と交流を提供した。また、いちはら×アートミックス 2014 や奥能登国際芸術祭 2017 でも食にまつわるアートプロジェクトを展開するなど、日本各地で活躍している。

プログラムディレクター：西尾美也

1982 年奈良県生まれ、同在住。美術家。東京藝術大学大学院美術研究家博士課程修了。文化庁芸術家在外研修員（ケニア共和国ナイロビ）などを経て、現在、奈良県立大学地域創造学部准教授。本事業のきっかけになった東アジア文化都市 2016 奈良市「古都祝奈良」出展作家。装いの行為とコミュニケーションの関係性に注目した作品や日本とアフリカをつなぐアートプロジェクトを各地で展開している。

演劇創作&公演（プログラム名調整中）

新型コロナウイルスの感染拡大により「人が集うこと」や「人と触れ合うこと」がリスクとして捉えられるようになりました。「古都祝奈良」ではこれまで「青少年と創る演劇」や「平田オリザの演劇ワークショップ」により対人関係を学びコミュニケーション能力を高める「演劇」の力を表現してきました。「青少年と創る演劇」の演出を務めてきた田上豊をプログラムディレクターに迎え、市民等を対象とした演劇創作&公演プログラムを展開することで、コロナ禍におけるコミュニケーションの形を見出すことに挑戦します。

プログラムディレクター：田上豊

劇作家・演出家。田上パル主宰。富士見市民文化会館キラリふじみ芸術監督。尚美学園大学非常勤講師。1983 年熊本県生まれ。桜美林大学文学部総合文化学科卒業。在学中に劇団「田上パル」を結成。方言を多用し、軽快なテンポと遊び心満載の演出で「揺らぐ人間像やその集団」を描き出すのを得意とする。

中高生や大学生との創作、市民劇団や公共ホール事業への書き下ろしなど、様々な形で活動を展開。創作型から体験型、育成講座まで幅広くワークショップも行う。「古都祝奈良 2019-2020」プログラムディレクター、劇団青年団演出部所属。

グリーン・マウンテン・カレッジ

グリーン・マウンテン・カレッジは、美術家の小山田徹を校長に迎え、参加者とともに対話を繰り返す「学び合いの場」として平成 30 年度から実施しています。

コロナ禍のなかで必要とされるのは「空気の共有」と「心の濃厚接触」であると小山田は言います。これまで焚き火の周りに人々が集う方法で実施していた本企画。今回は、小さな火を並べた会場で参加者は一定の距離をとりながらも同じ空間を体感することで心を寄せ合います。

校長：小山田徹

1961 年鹿児島県生まれ、京都府在住。美術家／京都市立芸術大学美術学部教授。

1984 年大学在学中に友人たちとパフォーマンスグループ「ダムタイプ」を結成。主に企画構成、舞台美術を担当し、国内外の数多くの公演に参加。1990 年から、「ウィークエンドカフェ」、「コモンカフェ」、「カラス板屋」や「Bazaar Cafe」など、さまざまな友人らと造形施工集団を作り共有空間の開発を行う。

平田オリザの演劇ワークショップ

日本の現代演劇を牽引してきた劇作家・演出家であり、幅広い演劇教育活動を展開している平田オリザによるワークショップ。

講師：平田オリザ

劇作家・演出家・「青年団」主宰。こまばアゴラ劇場芸術総監督・城崎国際アートセ

ンター芸術監督。1962 年東京都生まれ。国際基督教大学教養学部卒業。大阪大学 CO
デザインセンター特任教授、東京藝術大学 COI 研究推進機構特任教授、その他多数
の機関で役職を務める。主な著作に、『演劇入門』（講談社現代新書）、『芸術立国論』
（集英社新書）、『わかりあえないことから コミュニケーション能力とは何か』（講談
社現代新書）、『下り坂をそろそろと降る』（講談社現代新書）。